

トヨタ財団研究助成プログラム
オープンワークショップ（福岡会場）参加記

九州大学大学院人間環境学府 修士課程 金本佑太

今年度のオープンワークショップでは、「社会の新たな価値の創出をめざして」という共通のテーマのもとで、6人の助成採択者の研究発表が行われた。主な論点は、研究プロジェクトを通してどのような価値の創出をめざすのか、また、そのための方法（研究方法、実践方法）はどのようなものか、ということであった。

6人の報告は、2人ずつ3つのセッションに分かれて行われた。1つ目のセッションでは、「共生」というキーワードで、人間と動物の共生の事例について報告が行われた。2つ目のセッションでは「対話、コミュニケーション」というキーワードで、自助グループと演劇ワークショップに関する報告が行われた。3つ目のセッションでは「時間、空間」というキーワードで、津波被災集落の復興過程と、子ども時代の学校という枠にとらわれない教育の在り方に関する報告が行われた。

どの研究も、それぞれオリジナリティのある事例を対象にしていた。そのなかでも、そうした対象の現状分析を通して、それらが社会の変動なかで、あるいは社会が抱える問題においてどのような意味を持つのかについて考察するという、ミクロとマクロをつなぐ視点を強く持つ研究がみられたことは非常に興味深く、重要な点であった。たとえば、渡邊悟史氏の研究報告では、ヤマビルと地域住民の共生に関する議論が行われた。そこでは、地域住民の視点から、生活環境へ様々な悪影響を与えるヤマビルに対し、明確な分断線を引いて棲み分けを行うのではなく、上手くトラブルや嫌悪と付き合っていくという共生の在り方や、捕殺するとしても、人間としてヤマビルという動物をどれくらい殺しているのかを把握できる範囲での行動を心がけるという共生の在り方が示された。そうした事例、つまり〈不気味なもの〉との共生を考えることを通して、差別や排除、暴力が問題となっている現代社会において、様々な立場の人々（あるいは生命）の共生という価値と、それを達成するための考え方（方法論）の一端が示されたように思われる。

また、岡村健太郎氏の研究報告では、昭和三陸津波後の三陸沿岸集落の変容に関して、歴史研究の立場からの文献調査やフィールドワーク、さらには共同研究者による、現在も続く集落の復興過程の写真撮影を通して、アーカイブの構築が目指されていた。この発表に関して行われた発表者とコメンテーターらの議論においても、ミクロとマクロをつなぐ視点をどう持ちうるかという論点が示されていたように思われる。それは、岡村氏の取り上げた集落の復興には、「自分たちでできることから」という認識がみられ、「国家が防潮堤を」という上からの復興政策とは距離をとっている、という議論から導かれる。つまり、岡村氏の事例は、「上からの管理」というある特定の価値の押しつけを相対化し、「防潮堤ではない復興」という別の価値を選択した過程を析出しているのである。このように、ある地域の集落の復興過程というミクロな視点から、合理性を追求するという特徴を持った近代社会を批判的に検討するというマクロな視点へとつながっていく過程は興味深く、新たな価値の創出のための現状分析には不可欠であると感じた。

しかし、こうした議論は、報告者の発表のなかにすべて含まれているというものではなかった。他の発表者やコメンテーターらとの質疑応答や討論を経て、導き出された論点も少なくない。こ

の点が、今回のワークショップの大きな意義であるように思われる。今回の報告者のうち、研究プロジェクトが終了したうえでの発表と、経過報告としての発表とがあった。たとえば、蓮行氏の研究報告は、地域の多世代の住民と行う演劇ワークショップの効果に関する報告であり、途中経過としての報告であった。そして、報告の結論として提示された価値は「複雑なものを複雑なまま扱うこと」「複雑さの価値を損なわないこと」であった。この点は、価値の多様化の進む現代社会において、互いの価値を尊重し合ううえで重要な点である。しかし、やはり研究活動を通して行うべきは、そうした「複雑さ」の背景にある構造をいかに説得的に描写できるか、ということであるように思われる。この点に関して、発表後の議論の時間でコメンテーターらによる指摘が行われた。このように、助成採択者の研究に対して、今後の研究の指針の1つを提示することは、参加者側としてもオープンワークショップにおける議論の有効性を強く実感できる場面であった。

今回のオープンワークショップに参加して、異なる領域の様々なテーマの研究報告であったにもかかわらず、有意義な議論が交わされたことは、少し驚きであった。なぜなら、外在的な議論ではなく、「価値の創出とその方法論」という枠組みのなかで、それぞれの事例の背後にある問題にまで迫る議論が展開されていたからである。今回のセッションのうちの1つが、「対話、コミュニケーション」というキーワードで行われたが、このオープンワークショップ自体が、新たな価値の創出に向けた「対話」として機能していたと考えられる。